教養とは何か

——教養の二つの形(個人の教養と集団の教養)について——

阿部 謹也

阿部でございます。

本日は、日本経済史研究所にご招待いただきまして、ありがとうございます。

いまご紹介いただきましたように、今日は昨年刊行した『世間とは何か』という本に次ぐ世間論の二冊目として刊行予定の「教養とは何か」というテーマでお話するわけがあります。

『世間とは何か』という本の内容については、ここでお話ししません。教養の問題に限定してお話したいと思いますが、教養の問題というときに、大学の教養学部の問題も問題になります。もつと基本的な問題を、ヨーロッパの歴史に光をあてながら考えていきたいと思います。そして

同時に、明治以降の日本のいわゆる教養教育についても、目を向けていきたいと思えます。

ただ、副題については、後からご連絡しましたが、十分に意を尽くしてないところがありまして、個人と集団というふうに言うのは必ずしも適切ではなく、むしろ文字による教養と文字によらない教養というふうにとらえたほうが正確かと思えますので、これは後で内容に入ったところでお話申し上げたいと思えます。

教養という問題を考えるときに、何となく我々は文字による教養、そしてそれは個人の問題だというふうな考えがちだと思ふんですね。それはなぜかというと、従来の考え方によれば教養とは、たとえば広辞苑などを見ますと教養

の定義がなされているわけです。広辞苑には、非常に抽象的なんですが「単なる学識・知識とは異なり、一定の文化理想を体现し、それによって個人が身につけた創造的な理解力や知識、その内容は時代や民族の理念の変遷に応じて異なる」と書いてあるんですが、ここでは明らかに個人が身につけた創造的な理解力や知識と書いてあります。

私は、ヨーロッパ中世史を比較的時間長いこと勉強しております、その中で個人による教養というものはいつごろから生まれたのかということに関心をもってきたわけですが、それは明らかに大体一二世紀以降の問題だと思いますが、それは明らかに大体一二世紀以降の問題だと思います。もちろんギリシャ・ローマには少数のそういう発想はあったわけですが、大量現象としての、あるいは人間の生き方の基本としての個人の教養という問題は、おそらく一二世紀以降に普遍化していった問題だと私は考えるわけです。

そうしますと、それはなぜ一二世紀なのかといった問題が出てまいります、それについてはヨーロッパにおいては一世紀に個人が生まれたということ、これはすでに『ヨーロッパを見る視角』（岩波書店）という本の中でふれていきますし、大分前に朝日新聞社から『西洋中世の愛と

人格』という本を書きまして、そこでも個人の成立ということにふれています。

つまり、個人は普遍的に存在するものではなくて、ヨーロッパにおいては一二世紀以降に個人が生まれた。個体としての肉体はもちろん古くからあるわけですが、それは個体としての肉体にすぎないのであって、その個体は集団の中にいけば埋め込まれている、あるいは集団を通してのみ発現するような形になっていて、そういうふうな意味で個人というのは一二世紀にそういう殻を破って生まれてきた。

あえて言えば、一二世紀に生まれた個人がその後たとえばヨーロッパのフランス、ドイツ、イギリス、スペイン、イタリア等々でどういう社会的地歩を獲得していくかというの、いわば中世から近世にかけてのヨーロッパの大きな課題であって、それぞれの国がそれぞれの個人に対して対応する対応の仕方が、それぞれの国の近代国家と社会の特性をつくったというふうに私は考えているわけです。

個人の教養の成立

そういうふうに考えた場合、個人が社会の中に登場し、

やがてはコミュニケーションをつくったり、都市共同体をつくったり、ルネサンスを経て絶対王政のもとで自分たちの主張をしていくわけですが、それは最終的には市民的公共性という形に収斂してくる問題だと思えます。もちろんこれは最終とは言えなくて、ハーバマスに言わせれば市民的公共性は一八世紀に確立した後で転換しているということになります。

そして、日本においては市民的公共性という言葉は一応使われていますが、これは全体として浸透しているわけではなく、私はむしろ二冊目の本では世間という概念を市民的ではない、それ以前の公共性の一つの段階としてとらえたいと考えています。日本の歴史の中で明治以降翻訳語によっていろいろ表現される内容はいっぱいありますが、たとえば公共性という言葉は日本史の中で日本語で表現した文章は何かあるのか、あるいは語彙があるかと考えますと、公とかいろいろあるわけですが、公はとも公共性になじまないと私は思います。つまり、日本で言う公というのとは大きな家であって、それが国家につながっている、公共性につながるという意見もありますが、私はそれはむしろ官のほうに収斂していくものだと思うのです。

現代の社会を見ていけばわかるように、国家の権力はかなり強烈で、官も強い。そして個人も、ヨーロッパ的な個人ではなくて、わが国の個として、あるいはエゴとしてはかなり強固につくられつつあるわけですが、その間にあって公共という理念はどうかというと、風前の灯だと思えますね。つまりそれは建前としてのみ存在していて、実体をもっていない。そういうふうな考え方はいわば近代主義者と言われる人々がみなもってきた考え方で、だから日本はおくれているという議論に常になつていたわけです。

私は、そういう議論の立て方はかなり退嬰的で後ろ向きの議論だと思えますので、そういうヨーロッパと比べて日本がおくれているというふうな視点をもって日本史を見ている限り、無限におくれを指摘するにとどまってしまう。むしろ一つの社会が公共という理念全くなしで、ある程度の商品生産を推進させ、貨幣経済を推進させ、いわば近代化の萌芽をつくるということは多分あり得ないと考えますので、そういう意味ではどんな社会にもそういう段階に至ったときには公共性という形が何らかの形であるはずだというふうには考えますと、非常に古い概念であります。世間という概念はむしろ日本の公共性のある段階を示して

いるのではないか。こういうふうに考えるわけです。

今日はその話に入りませんけれど、そういう意味ではハーバマスの具現代表的公共性という理念、これは市民的公共性が成立する以前の、いわば君主が存在する中で公共性でありますが、それは注目すべき視点だというふうに考えています。しかし、これは今日の主題ではありません。

今日の主題は、教養とは何かということですが、個人が成立してからヨーロッパでは、一人の人間が父親の職業を継がなくてもいい道がひらけたと思います。それは、都市の成立、国家の成立、いわば官僚制の成立、ローマ法のレセプション、こういう問題とからまって、個人はおやじが武士であれば武士にならなければならなかったわけでありますが、それが、父親が農民でも、場合によれば都市に行けば職人になれるかもしれない。おやじが武士でも都市に行けば神学者、あるいは哲学者、あるいは官吏、法律家になる道が開けた。

そのためには大学が門戸を開いていて、ある程度のラテン語の力、基礎の学力があればだれでも受け容れられた。入学試験はありませんから、だれでもが受け容れられた。

しかし、卒業までには何年もかかって、生活費も自分で稼がなければなりませんし、たいへんな努力をして少数の人々が普遍的な言語であるラテン語を使って教育を受けた。こういう道が開けてくるわけです。そうすると、おやじの職業を継がなくていいところから職業選択のある程度の自由が開けたわけですね。そのあたりで教養が問題になります。

どういふことかと言いますと、個人が成立すると言っても、その個人はまだ少数にすぎない。こういう人々は、新しい社会の中でどうやって適応していくかという問題を抱えます。個人が成立したというとなんかいきなり生まれるように思われますが、そうではないので、やはり悩みとか苦しみの中で徐々に生まれてくると言ってもいいと思うのですね。

そういう意味では、ヨーロッパで成立しつづつあった個人はどうして生まれたかという問題もあるわけで、今日ここでそのお話を復習しますとそれだけで数時間とりましますで、一言で言ってしまうえば、個人は制度として生まれたというふうに言うべきだと思うんですね。つまり徐々に生まれたというのと、従来の歴史家がしばしば使うだんだんとそ

うなつたとか、徐々にそうなつたとか、そういうふうに言つて決定的な要因というものについて指摘しないまま終つてしまふわけですが、私はやはり個人は制度として生まれたと思います。

それはどういふことかと言へば、キリスト教の浸透と、それと同時に告解(コンフェシオン)がいれば制度となつたとき、一二年五年のラテラノ公会議においてすべての信者は一年に一度は告解をしなければならぬということが義務になつたとき、これは法律的にも、教会法であります。が、義務になつたわけです。そこで告白すべきことの内容は、贖罪規定書という神父さんのためのマニュアルがありますが、この段階で何が罪かということはプロフェツショナルな人でもよくはわからなかつたわけですから、その程度のキリスト教の浸透の段階でしかなかつたので、告解を聞く司祭としては何が罪かということについてマニュアルを持つていたわけです。

このマニュアルは長いことローマ教皇庁バチカンの奥にしまわれていて公開されてなかつたんですが、もう一〇〇年以上前から部分的に活字になつていまして、日本語の翻訳もいま若い人がやっているとありますが、これは

実に驚くべき内容のものであります。

どういふことかというところ、自分の行動を内面に照らして何が罪かということをも司祭に指摘されて、それに全部答える。その答える内容のほとんど、全部じゃありませんが六割、七割はセクシユアルな日々の生活であります。妻とのセックスとか、その他を含めて。こういう内面を表現して、それも秘密の告白という形にします。最初は公開の告白だつたんですが、やがて秘密の告白になつて、司祭と二人だけの間で告白をする。こうして自分の内面をさらけ出すことによつて、いわば内面を持ち、常にそれを意識する人間が生まれてこざるを得ない。

個人が存在していなかつたとされる一一世紀以前については「アイスランドサガ」などの史料があるわけですが、あれはたいへん面白い史料で、個人の内面が間接的には描かれてないわけじゃないんですが、直接には描かれない。全体として内面を持たない個人が描かれています。しかし、我々が読めば、この男は気がついてないが恋愛感情に悩まされているんだということがわかるわけです。しかし、本人たちはそれに気がつかないというふうな叙述になつてゐるわけです。

ところが、制度として告解が義務化されますと、自分の

内面をさらけ出す必要が出てくる。そしてその内面をさらけ出させるのは、機関としての教会であり、そして知識もそれほどない司祭たち、つまりローマ法の知識、教会法の知識もそれほどなくて、ほんのわずかのことしか知らない、農民とそう違わない教育程度の司祭がそれを聞くわけであります。しかし、それが現代に至るまで連続と続いているということは、ヨーロッパというもののすごさと言いますか、強さというものを示しているわけで、その話もすでに書きましたのでここでは繰り返しません。ただ、内面の告白が個人の成立のきっかけとなったということを指摘しておくにとどめたいと思います。

そして、個人が成立して、その個人が都市の中で自分の生き方を考える。まず考えることは職業の選択です。そして、それが決まった後も、従来の農村共同体の伝統的な絆の中で生きてないわけですから、新しい都市共同体の中で自分たちの生き方を考える必要があります。そして、従来のような共同体のふところから出て生活している人は、自分の生き方を考えざるを得ない。それは、いかに生きるかという問いをはじめてこの段階でヨーロッパの人々は

もったということなんです。

そのときに彼らは何を参考にして生き方を考えたのか。何も参考にしないではそういうことは考えられない。そのときに彼らは、言葉でさえ不自由で、ドイツ語、フランス語、英語といった当時の自分たちの母国語、あるいは母語あるいは俗語では内面を語ることができなかつた。そして、彼らはその際に、ラテン語の勉強をもう一度しなさいなければならなかつた。なぜかというところ、彼らがいかに生きるべきかということの問題として立てますと、それに答えられる参考文献としては、古代末期のものしかなかつた。古代末期というのは、ローマ帝国が崩壊していく中でキリスト教徒としては何をなすべきか。自分たちは何をなすべきか、何ができるかということが問いであつた時代、そして自分の運命と国家の運命との間にどういつながりがあるかということと考えた人々、たとえばポエティウスという人が『哲学の慰め』という本を書いています。彼は無実の罪によつて死刑の宣告をされて、その死刑の宣告を受けた身で、獄中で真理の神と対話をするという形で自分の心境をつづつていっているわけです。これは、いま読んでも非常に訴えるところがある。ある意味で普遍的な個というも

の悩みを描いたもの、人生とは何か、死とは何か、生とは何かということを問うたものでありますが、こういうものを通して一二世紀に生まれつつあった個人は自分の感慨を読み取ったわけです。

その中でいかに生きるかという問いが出てきたわけで、私は、いかに生きるかと自ら問うようになつたということが教養というものの出発点にあると考えています。どうかと言いますと、先ほどの広辞苑の定義も同様で、教養の定義というのはないんですね。いろいろ調べてみましたが、教養があるとはどういうことかについて、私が納得する定義はなかつたのです。

そこで、定義をつくらざるを得ないので、私は勝手に定義を試してみたわけです。どういう定義かと言いますと、教養というのは社会の中での自分の位置を知ろうとする努力、あるいは知っている状態、あるいは知ろうとする努力の総体を言う。つまり、社会の中で自分はどう生きていくのか。どういう状況にあるのか。何ができるのかということを知ろうとしたり、知っている状態を教養と言うんだというふうに、私はとらえたわけです。

そうしますと、社会の中での自分の位置を知ろうとした

り、知っている状態というのは、この当時の人にとってみればやはり一番関心があり、そうなりたいと思っていた状態です。そして、ここで教養は二つに分かれるわけでありますが、いまお話ししてきたのは個人の教養ですが、個人は新しく生まれた都市とか新しい国家の中で自分の位置を知りたい。自分の位置というものを知らうと努力する。これは個人が生まれなければできなかったことです。

と言いますのは、それ以前の農村共同体とか漁村でもないんですが、そういう中で個人はそういう問いをもったか。おそらくもたなかつたと思うんですね。この村で自分はいかに生きるべきかという問いをもつたかと言われれば、私はもつていなかったと思います。それはもちろん断言はできませんが、私は全体を考えながらそう思うわけです。

では、一つの共同体とか集団が、自分たちがいかに生きべきかという問いを一切もたずに生きることができるとか言え、それはできない。つまり、この場所ですべても暮らしてゆけるのかとか、漁獲高も減ってきてしまつて別のところに動かなければいけない。あるいは畑がだんだんやせてきて、ここでは食っていけない。そういうときにど

こをさがすかということとは当然のこととしてあるし、まわりの集落あるいは集団との戦いとか、そういうこともあるわけですから、やはりそれは総体としてはいかに生きるかという問題にかかわってくるような問いに人類が直面して生きてきたわけですから、そういう集団としていかに生きべきかという問いは、みなあつたはずです。

しかし、それは少数の支配者あるいはリーダーによって考えられ、集団で討議されたかもしれませんが、抽象的に自分が、集団のなかにいる個人がいかに生きるかという形で論じられたことはなかった。集団としてはどうすべきかは常に考えていたと思います。

そういう意味では、教養というのはこのあたりで全体を分けますと、人類の歴史とともに古いと言つてもいいような、いま言った集団としての社会の中での我々の位置、あるいは諸集団の中での自分たちの位置、自分たちの集団の存続というものを賭けた問いは常にあつたはずだ。しかし、個人がその集団の中でいかに生きるべきかという問いは、ヨーロッパでは一二世紀以後であり、萌芽的にはローマ末期、あるいはギリシャの時代に生まれている。こう考えるわけです。

そして、一二世紀に生まれた個人たちは、自分の生き方を考えるときにラテン語の書物を読む以外なかった。語彙が非常に不足していて、近代語では、ドイツ語、フランス語、みなできませんが、当時の俗語ではそれを考える手段がなくてラテン語を使わざるを得なかった。従つて、教養の問題、社会の中の生き方を考えるときは常に古典を参考にしたというのが後々まで影響し、古典語ができる人は教養のある人になつてしまうという事態を生んだわけです。そしてやがて古典語の作品をよむことが教養と同義語になつていったのです。

教養のはじまりというのはこういうものであるわけですが、これが後にどうなつていくかということ、あまり時間がありませんから一挙に時間を飛ばして見ていく必要があるわけですが、その前に一二世紀にこの問題について一番注目すべき見解を述べた人について簡単に紹介しておきたいと思ひます。一二世紀の個人はどういうふうに生まれてきたかということ、一人一人についてわかっている限り明らかにする道があります。

サン・ビクトールのフーゴ

いま、我々がすぐに手にとることができるのは、たとえば有名な「アベラールとエロイズの往復書簡」というのがありまして、これについては多少真正さに疑いがあるわけです。つまり本当のものかどうか疑いがありますが、あの二人が生きていたことは明白であり、二人に関係があったことも明白であり、子どもがいたことも明白です。従って、外側の事実は全部明白なので、往復書簡そのものについては多少疑問が残りますが、私は正しいものという前提で読んでおりますが、あれを見れば一二世紀にははっきりと個人が生まれている。

もう少し余計なことを言えば、一二世紀にヨーロッパでは恋愛が生まれたと言われています。これも我々から見ればおかしいわけですね。私は周辺の日本史の研究者に「日本では恋愛はいつから生まれたんでしょう」ということを何となく、昔ですが、お酒の席で聞いたことがあります。そうすると半数以上の人は冗談を言っていると思つて、「男と女がいれば、いつだってそんなものあるんじゃないの」と答える人もいるし、「エッ、そういうことを歴史的

に確認できるかな」と言う人もいますし、いろんな対応であります。それは日本の歴史の中でそうなってきたということです。

しかしヨーロッパ史の研究者に聞けば、ほぼ即答が返ってきます。一二世紀という答えが返ってきます。もちろんこれについても多少の問題はありますが、一二世紀に南フランスで生まれたトゥルバドルがやがてミンネザングに移っていくんですが、一二世紀前後に南フランスの若い騎士たちの間で生まれた吟遊詩人と言われている「トゥルバドルの歌」あるいは「トゥルベールの歌」の中にあらわれている恋愛のあり方は、対等な男と女の間での恋愛です。

それ以前の文学作品の中にも恋愛感情らしきものは残っておりますが、それはほとんど男中心で、男は女のことに全然思い思わないが、女性は男のことを考えて命を投げてもらう形になるというふうなものが、たとえば「ローラの歌」なんかに出ています。しかし、この吟遊詩人の歌を読むと、全く対等なというよりむしろ女性優位であつて、恋愛というのは既婚婦人に対して若い独身男性が恋い焦がれて命をも捨てるというふうな行為というふうなま

解釈できるわけで、この点は別な機会に書きましたので改めて申し上げませんが、そういう例があります。

しかし、学者の中からさがしてみると、たとえば、簡単にご紹介するだけにとどめますが、一四一年に死んだサン・ビクトールのフーゴーという人がいます。この人はドイツ生まれですが、大体パリで過ごし、パリのサン・ピクトールという修道院で生涯をおくった人です。この人には『ディダスカリコン』という本があります。

『ディダスカリコン』というのは学習論という本で、私はヨーロッパにおける最初の読書案内だと思っています。

本当の意味で読書案内ですが、ここで何が言われているかというところ、知恵の研究というのは人生における最高のなぐさめであり、知恵の研究は即哲学だ。すべての人間的、心的事物の根柢を徹底的に探究する学問だ。細かいことを言えばきりがありませんが、ここで何が問題かということだけ言いますと、サン・ビクトールのフーゴーというのはなかなかの人物で、この人の書物は非常に注目すべきものをいっぱいもっているんですが、たとえばわかりやすい例、比較的知られている話をしますと、彼は「学問のあり方と形式」というところで、どういうふうにしたらば本

の学問ができるのかということを問うて、それに答えています。

一つは謙虚な精神をもつこと、探究への熱意をもつこと、静かな生活、それから黙々と吟味する。ここまでは我々でも理解できます。次に、貧しさと言っています。これも我々も理解できなくはない。次に異国の地と云っているのです。これはすぐには理解できない。つまり彼は、謙虚とか探究の熱意とか静かな生活、黙々と吟味する、あるいは貧しさが必要だと言いながら、それだけではなく異国の地にあることが必要だと言っている。

この異国の地というのは一種のシンボリックな言い方でありまして、もちろん外国へ行けという意味ではないんです。そうではなくて、この後のほうでやはり同じようなことを言っています。全世界は哲学する者にとっては流謫の地である。流謫というのは、亡命と言いますか、自分の故郷ではないところに流されていく。正当な市民権をもたないところに住まわせてもらっているという感じを言うわけですが、全世界は哲学する者にとって流謫の地である。

たとえば、彼が書いた文章をこの『ディダスカリコン』から、サイドはかつて「オリエンタリズム」という本を

書いたときに一行引用しました。彼の引用は全文じゃないんですが、その引用された部分を読みますと、「祖国が甘美だと思ふ人はいまだくちばしが黄色いものにすぎない」つまりまだまだ大人じゃないよという意味ですね。「そして、すべての土地が祖国であると思える人は力強い人だ。しかし、全世界が流涕の地であるという人こそ完全な人である。」こう言っています。

解説がついていまして、一番最初の人は、世界に愛を固定しているからと言っています。二番目の人は、世界に愛を分散している。三番目の人間は、世界への愛をいわば消し去っている。従ってこれはやはりキリスト教徒でなければ言えない言葉で、日本の場合でも仏教を見ますとこういう発想はなくはないんですが、つまり世界への愛なんてものがあつてはだめだ。世界そのものが全部無縁の土地で、自分はその中に入った一人であつて、そこで天国へ行く道を模索する。みんなが天国へ行けるような道を模索する。これが学者の本当の姿だと言っているようなんですね。

こういうところがあるわけですから、彼の学問はなかなか面白いし、それからまた彼が学問について言っている言葉の中でこういうことがあります。七つの学問というのが

自由学芸と言ひましてヨーロッパの基本的な学問の形なんですが、それはどういうものかというところ、神学、数学、自然学、音楽、幾何、天文学、等々を含んだものですね。これが当時の学問の基本ですが、この中の、たとえば神学でも、自然学でも、天文学でもいいんですが、一つをやつて、その中で完全にその道を究めたからといって全体がわかつてないのはどうもならないので、全部をやつてはじめて完全になるんだ。だから、一つの学問の中で専門家になつてもヒヨコにすぎないと言っています。

さらに、最終的にはこの全学問をおさめて最高の学者になつたときに、ある男はそこで陶工になつて修行中である。従つて陶工としては全く未熟なもので、師匠に怒られながらやつている。これが本当の学者だと言っている。あるいは、最後には靴直しになり、靴直しの職業の中に自分は没頭し、そこではまだ完璧にならないということで励んでいる。これが学問というものの本当の姿だと言っています。

こういうことを言つた人は非常に少ないし、さらに哲学者についてはもっと鋭いことを言ひまして、これもちよつと引用しておく価値があるんですが、こういうこと

を言っているかというところ「哲学者とは何か。クダクダと回りくどくいあらわすことよつてのみわずかの事柄を引き延ばすことを常としており、たやすく見てとれる意味を込み入つた議論によつてわかりにくいものにすることを常としてゐる職業だ」と、こういうことをはつきり言つてゐます。

中世の学者で、我々はトマス・アクィナスなんか読んで、頭はいいだらうと思うんですが、やはりこういうふうな議論に見えてくるんですね。それをこういうふうにいぐりだしているところにすごさがあるし、彼の『デイダスカリコン』には学問の系統図が描いてあります。

たとえば、哲学という学問は四つに分かれる。思弁学、実践学、人工人造学、論理学、これからずつと分かれて、たとえば思弁学は神学、数学、自然学、算数、音楽、幾何・天文学、天上の音楽、人間の音楽、器楽、楽器の学問、音楽になる。実践学というのは個人の実践と家庭の実践と公共の実践に分かれ、個人の実践からは倫理学と道徳学、家庭の実践からは家政学と経済学、公共の実践からは財政学と国政学が生まれる。

人工人造学からは、機織り、兵器、商学、農業、狩猟、

医学、演劇、その下にまだ家事とか建築とかパンとか、医学の中の具体的な施術とか娯楽とかいっばい出てくるんですが、少なくとも一二世紀の学者で財政学とか商学とか経済学とか、あるいは農業技術、狩猟、演劇にまで目を配つていた人は他にはいないわけです。しかもこれらは全体を修めなければならぬと言つてゐる。そういう学者がいたのです。

この学者は百科全書的なんで言われますが、私はもつと重要な学問の基礎を築いた人だと思ひますが、それは後に忘れられていつたわけです。私は、この人がこういうことが言えた背景には何かがあるかと考えますと、当時の教養というものの二つの違いを彼は十分にわかつていたからだと思ふんですね。

どういふことかと言いますと、先ほど言いました個人の教養、これを当然彼は主に主張し、自分も実践した。しかし、彼の目には個人の教養ではない集團の教養というものがある。非常に多く見えていて、集團の教養というのは文字によらないものだということですね。それも彼ははつきり見ていたと思ふのです。そして、文字によらない集團の教養というのは、先ほど言いました実践学のほうに連なつてゐる

農業、狩猟等々の、いわば手工業に広がっていく。彼の跡を継いだわけじゃありませんけれども、17世紀にユストゥス・メーザーという学者は「貴族の師弟は、まずもって手工業を学ぶべきだ」と主張しましたが、もちろんこれは少数の声にすぎませんでした。

そして、教養というものをもう一度振り返って考えますと、我々は何となく教養というと、大学を出た人、あるいは大学を出なくてもものすごくたくさん論語等々の書物を読んでいる人、そして古今東西の書物に通じているだけでなく、身のこなしから態度、物腰も含めて、いわば人格者をイメージします。教養というものがもし文字に限定されていて、ラテン語、ギリシャ語等々ができ、漢籍が読めて、本をうんと読んでいる人ということになれば、そんな人はそんなに珍しくはないわけで、いるわけですね。

私も、六〇年ちよつとの生涯の中でそういう人に会ってきたと思います。そういう世界にいたわけですから。しかし、人格が高潔なんていう人は、残念ながらほとんどいなかったと思うんですね。学問がある人でも、それなりに卑しいところもあるし、俗人でもあるし、私はそういうことをいやだと思ったことはないんです。むしろ安心しまして

そういうところがあつたかとホツとするところがありました。た。

しかし、顔の好みというのがありまして、たとえばいま私がつきあっている漁民とかはかわいそうな人たちで、みな自分の息子がもう漁業をやらない。漁業から手を引いてしまうという最後の局面にいる漁民が多いんですが、こういう人たちも含めて大体知識というもので暮らしているわけじゃないけれど、しかし漁業だつて知識なしではやっていけない。

たとえば自分の漁獲物をあげるときに、かごに入れて市場に持つて行くんですが、今日は何曜日かということをおぼれたらえらいことになる。たとえば木曜日なら木曜日の場合はどういう仲買人が来るかということがわかっていて、この人の宗派も問題になり、そのときに値がどうなるかも決まっている。自分の父親が跡を継いだときに、魚は全く変わらないのにドツと値が下がった。つまり、漁民にも一種のトレードマークがあるわけですね。

つまり、おじいさんの代はずっと高かつたんだが、じいさんが死んでおやじが継いだときに、魚は全く変わらないのにドンと値が下がってしまうということもその地域の状

況の中では把握していなければいけないということも含めて、農業も同じであります。その地域だけではなくて全体の経済圏に巻き込まれていることをちゃんと知っていて、それに対応しているということも含めて、文字とか、あるいは書物とかとは関係のない、いかに生きるかという問いに結びついた、そしてその社会の中でどういう状況に自分があるのかを知っている状態というのはどこでもあったし、それがなければ生きてこれなかった。

こういう状況をサン・ビクトールのフーゴーは知っていたと思うのですね。従って、彼はあらゆる学問を全部修めた人たちも自分の学問を本当にするためには手工業に打ち込まなければいけない。そして、八〇まで漁業とか農民をやった人は、ほぼ例外なくいい顔をしている。いい体をしている。そして、いい体とかいい顔というのは、抽象的に好みの問題ではなくて、実は中身と対応している。

近代になって、個人の教養が広がってきたわけです。それが国家によって支えられて、いわば教育機関の中で行われるようになって、いま我々はその結末と言いますか、その状況の中にいるわけで、私なども全くその状況で、若いときは山登りなどして比較的体力に自信もありましたが、

この年になるとあちこちの病気とかで、これは長年の不摂生とかがたたって見るかげもない状態ですが、そういう状態だからなおさら思うのは、やはり健康ということと知的な開発とは不可分の関係になければいけないのではないかといいことです。

文字によらない教養

たとえば、私の大学で大学院生がかなりいま問題をもっています。そしてまた何となくあまり集団の中に適応しにくい人が比較的多いので、ノイローゼになったり、場合によつたら自殺したりする人がそう少くはないんですね。私はむしろ体育なんか大学院に課すべきだと思っておりますが、強制してはいけませんし、どうしたらいいのかと思っておりますが、これはいま言ったような問題の具体的な側面です。

そして、体力とかそういうことだけでなく、身体というものが年とれば老いぼれていくのは当然であります。美しいということとは、やはり漁民とか農民の場合にはつきりあるわけです。そして長年ある職業、特に手工業に打ち込んできた人の美しさというものは学者たちには求む

べくもないとすれば、やはり私的な個人の教養そのものに問題がないとは言えないというふうに考えるわけです。

そうしたときに、一二世紀までさかのぼってどういう教養のものとの形があったというふうに考えますと、サン・ピクトールのフーゴはさつき言いましたようなさまざまな学芸の果てにつくべき職業として手工業等々をあげていて、そこには根拠があったと思うのですね。

その根拠とは何かと言いますと、我々は文字による教養に限定してきたために、何となくいまでも教養というところにとちやみこまに目を向けがちですが、当時の、特に中世から近代に至るまでの過程、特に中世全体を通じて文字というものゝの位置は非常に低かったと言わざるを得ません。つまり、文字とか言葉を通じて人にコミュニケーションする、伝達するときに、非常に繊細な人と教育がある人はそれを受け止めますが、そうでないほとんどの人の頭上を超えて飛散してしまうのが、言葉とか文字というものの運命です。

これはいまでもそう違います。現在は情報化社会で、イメーヂあるいは絵というものが、たとえばインターネットを通してテレビを通して広がっています。つまり、つ

まらない話をして恐縮ですが、日本の歌謡曲、たとえば演

歌というものを聞きます。演歌という字は艶やかな歌というふうに理解している人が多いんですが、本来演説の演という字で書いている。演歌というのが生まれたのは明治のころで、大体において演説のときに歌った歌、そして最初はみなたいへん勇壮なものです。これはいわば自由民権運動と不可分の関係があつて、そのへんの研究も多少小島妻子さんあたりがやっておりますが、そういうものだったのが変わってきてしまつてゐる。

そして、自分が調べたわけではありませんが、演歌の男と女の恋歌みたいなものがいっぱいありますね。これを、テレビで字が出ますからそれをじつと見ていますと、私は、これはみな憧れではないかと思うんですね。実態ではないでしょう。はやりすたりがあつて、すぐ消えていく。実態は、もちろんすべての人がこのような形で恋愛をしているわけじゃないんですが、想定された恋愛感情、つまり着てもくれないセーターをずっと編んでいる女とか、何となく男の側からそういう女性がいるといいなと思われるような状況というものに対応して作家がつくつたものが多くて、そういうものにみな心を入れるわけじゃないんですが、ある憧れをもつて耳を傾けて過ごしているという状況

がある。

つまり、言葉というのはそういう形でいま再生産されていて、真実のところには届かないというふうになつていく。これは映像とか音楽の場合は非常に多いケースであります。学問の世界にまでどうもそういう影響があるんじゃないか。つまり、中世を通じて文字とか言葉ということのは大きな意味をもつてなかつた。それはどういうことかという、聖書研究というものがあつまして、これはたいへんな一つの分野をつくつたために、文字がすべてであるかのごときイメーシが近代になれば強まつたわけです。

しかし、最近、ジャン・クロード・シユミットという人が『中世の身ぶり』という本を書いたのが翻訳されました。これは大分前に出た本ですが、それが翻訳されて読めるようになったんですが、この中でたいへん重要な事実を彼は冒頭で紹介しています。どういふ事実かという、ユーク・カペーというフランスの公、やがてカペー王朝を開く男であります。この男が当時の皇帝であるオットー二世とどこかの場面で一緒になつたのです。オットーというのは老獪な皇帝でありますから、フランスのユーク・カペーをとにかく従えたいと思つてゐる。そこで策略を弄

した。

どういふことかという、二人で並んで座つていて、オットーが出ていって何か行事をする。一種のしきたりに沿つた行事をする場面があつたわけです。そのとき彼はわざと剣を忘れて、自分のいすに剣を置いて数歩前へ出た。そして何か儀式をしようとして気がついたふりをし、後ろを振り返つた。もちろん剣を取つてこようと思つたというふうにはだれもが理解した。

ユーク・カペーとしては、若いわけだし、オットーのほうが年上でもあるし、いわば位としても一応上ですから、剣を持つてそばへ行かなければならない。そのときにはもちろんひざをついて渡さなければならぬ。その構図というものが確定すると、決定的なダメージをユーク・カペーとしては受ける。つまり、フランス王としてはドイツ王に、皇帝であります。臣従するという形になる。こういうことは明らかだったので、心ある人はみんなハツとしたわけです。

ユーク・カペーは剣を取ろうとした。せざるを得ませんから。そのときにある司教が、名前も残っていますが、そういう場面で絶対してはいけぬのは走つたりすることな

んですが、それを走つてやつてきて、ユーク・カペーの手からもぎ取るようにして剣を取つて、オットーのもとに行つてオットーに剣を渡した。これで彼はフランスを救つたと言われている。いわば単なる動作にすぎないんですが、この動作にすぎないその動作のほうが言葉よりもはるかに大きな意味を持つというふうに言えば、我々も納得するんですね。

日本の場合も、いまでもそういうことがある。たとえば、前に何とかいう国会議長は、国会で詔書を天皇が読む。その詔書を持つて上がり、持つて下りる。そのときに後ろ向きに下りなければいけないんだが、彼はもう七〇いくつか、年を忘れましたけれど、老人で後ろ向きで下りられなかつたために国会議長をやめたんですね。

つまり、国会議長の職責というのは、後ろ向きで階段を下りることにかかつているということになるわけで、これは、それだけ書けば実にばかげた話ですが、実はヨーロッパの中世を知っている人間が見れば、日本はまだ天皇家に關しては、中世の部分が残つていて、日本はまだ天皇家に別におかしくはない。ああいうことは当然だつたわけですね。

いまでも東宮御所へ行きますと、侍従たちは必ず、たとえば食事を持つてきても後ろ向きに出ていきます。外から来た客は、たとえば客が先生であれば天皇も皇太子も立つて迎えますが、そして外から来た客はお尻を向けて出てきますけれども、侍従たちは全部お尻を向けないということが残つていますので、そういう身振りとか、ちよつとした微笑とか、ちよつとした表情というものがあるのは人間の行動の中でかなりの役割を果たしているのです。

これは中世の人々の理解ですが、魂は身振りにあらわれる、人間の意志は言葉にあらわれるというふうに言われています。従つて魂を読み取る時には身振りを見るのが一番いいということで、動作とか身振りについては非常に詳しい規定がありまして、それは実に大きなさまざまな問題になつていたわけです。

たとえば王さまがしてはいけない身振りがはつきりありまして、どういう身振りがいけないか、どういうふうになければいけないかということはいっぱいありますが、たとえば顔は常に真つ直ぐ前を向いてなければいけない。横を向いてはいけない。唇を曲げてはいけない。口は開いたままではいけない。また、高慢な目つきもいけない。下を

向いてもいけない。首を傾けてもいけない。眉を上下に過度に動かしてはいけない。速い動作は絶対にいけない。穏やかな視線でいなければいけないし、飛んだり跳ねたりも全くいけない。

こういうふうに見ますと、たとえばヨーロッパのテレビのアナウンサーたち、あるいは政治家たちがそこへ登場する場面を見ていても、全く基本的にその形を踏んでいるんですね。これは驚くべきものです。つまり一〇〇〇年も前の、あるいはもっと前から伝わっている身振りに関する一種のルールがありまして、このルールを彼らはきちんと踏んでいる。日本のテレビの解説者たちはそうではない。特に映画俳優とかタレントという人々はもちろんそういう習練を踏んでいませんから、全くだめだと思いますね。

だめというのは、そういうふうな形がない。もともとないわけじゃなくて、日本には明治のころまではあったわけです。どんな人にも形がありました。その形が消え去ってしまつて、職業にまつわる身振りとかが形があつたんですが、それが消えてしまつた。こういうことを言つてもしようがないんですが、そういう状況になつてゐるということも頭に入れたうで、大体集団としての文字によらない教

養、つまり身振りとか手振りとか技術、体に埋め込まれてゐるような技術というものが、いわば礼儀作法の根底が実は文字ではない、言葉でもない、身振りにあつたということとです。

このことは、私は、石工のあいさつの儀礼で書いたことがあります。これはもう二〇年ぐらい前ですが、石工が字が読めないわけですね。字が読めない石工が別な町に行つて、自分が石工だということを証明するためにはどうするか。集団でダンスをし、そのダンスの中にスツと入つていき、ピタツとそれがうまく踊ればそれで証明される。非常にはつきりした体に埋め込まれた教養なんです。そして、石工の身分が証明される。そのためのダンスのステツプを描いた図がありますが、こういうものがあつて、これが消えてしまつたのが現代なのです。

そこで、今日は個人の教養というものがどうなつたかということを少し見ていきたいんですが、教養という言葉は日本の辞書では、先ほどの抽象的なものしかない。ところが日本では教養という言葉が広まつてくるのは大正年間からで、いまでは拒否されたり否定されたりしていますが、やはり旧制高等学校と旧制帝大の文系学部においてはごく

まれたものが教養の原点だったというふうに言われている
と思うんですね。

観念論哲学と教養

ところがそれは、実はドイツの大学においてつくられた
ものを日本がまねたものだと言って差し支えないと思いま
す。教養というときにビルドゥングという言葉を使いま
す。たとえば教養小説はビルドゥングスロマンとか、
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』という本があり
ます。戦前の高校生はみな読んだわけですが、これも教養
小説の典型と言われています。シューベルト作曲ミューラー
作詩の「美しき水車小屋の娘」あるいは「冬の旅」も教養
小説の一端に連なるものですが、全部遍歴の徒弟が主人公
とされています。

しかし、我々が読めばそうでないことは明らかです。た
とえば川端康成の『伊豆の踊り子』というのは、職人が主
人公ではありません。あれは一高生が主人公です。ドイツ
のリートのなかで職人という形で、ドイツの学者たちの
卵、学生や教養人は自分が振り捨ててきた、そこから抜け
出してきた大衆の世界、職人の世界をなつかしみながら、

ああいう歌曲を作ったわけです。

つまり、ドイツの観念論哲学と新人文主義の中で、教養
という概念が制度化されていくわけです。大学というもの
が一二世紀以降できまして、そのころは法学、医学、神
学、一般教育というこの四学部だけだったんですね。これ
らは産業とは何の関係もありません。大学の卒業生は、官
吏になっていくか、神学者になるか、医者になるかという
道を選んだ。一般教養というものを選んだ人はいろんな道
に進むことができますが、大学には専門学部は三つしかな
かった。

それでは近代産業社会を維持できないので、啓蒙主義時
代に各地に単科大学がいつばいできます。たとえば経済大
学、農業大学、鉱山大学とか、工業大学とか、そういう大
学がいつばいできまして、それはいわば専門大学になるわ
けです。そして専門家が生まれてくるわけですが、それに
対してドイツではヴィルヘルム・フォン・フンボルトとか
シェリング等々が危機を感じてベルリンに教養大学をつく
ろうという運動がはじまります。それはどういうものかと
いうと、教養というものを教える大学だ。孤独の中で身に
つける教養を通して人格形成をする大学です。

そのときに、たとえばフンボルトは何と言っているかという、一人一人の人間の自発的活動によってのみ、その教養は獲得されるのであって、人間の知的な自己教育という形の中でのみ獲得され、人間の知的な教育という中で達成される。しかも、そこで行われる学問は純粋な学問でなければならぬ。

純粋な学問とは何か。それは純粋な認識と言ってもいいのだが、人間の自己形成の第一手段だ。特定の目的、たとえば経済活動とか、商業活動とか、医学とか保健衛生とかいう特定の目的から離れて、そういう具体的な目的にしばられずに、自由にそれ自身のために習得されなければいけない学問を言う。いわば世界認識としての哲学ということになるけれども、それを大学で行うべきだとしたんですね。

そして、シエリングとかフンボルトたちは、孤独と自由というものが大学の将来の姿だと、こういうふうにいきました。「アインザームカイト・ウント・フライハイト」という言葉を使ったわけですが、これは実際の生活に直接関係を持ち、実際の生活に応用され、それとともに特殊専門化された学問を全部拒否する。そこではそういう実用向き

の学問をやらない。こういうことを主張したわけです。いわば、日常生活をはるかに超越していて、日常生活には直接影響を与えないようなものとして学問が考えられる。学問による教養というのはそういうものだったのです。

ベルリン大学はそういうものとして生まれた。従って、ベルリン大学を卒業した人は、官吏になるか、法律家になるか、大学の教授になったわけです。そして、ベルリン大学以外のドイツの大学は後にみんなベルリン大学化するわけですが、高等学校でも、基本的にはそういう教養の下地がつくられた。そして、現在でもそうですが、小学校四年のときからその高等学校に入る人は選抜されて、そこで古典語、ギリシャ語、ラテン語等を学び、基本的には高等学校でギリシャ語、ラテン語等の古典語を学び、一般教育を学び、大学に入りますますそれを深めていく。そういう道になったわけです。

日本はどうかというと、日本も明治以降、旧制帝国大学をつくる中で基本的にはベルリン大学の理念を受け継いだわけです。そして、そのベルリン大学の理念を受け継ぎまして、文系学部は全部そういう形になりましたが、もちろん後進国で、そのころには欧米諸国は産業革命を経て大き

く躍進していた時代ですから、もちろん古典的な教養だけではやっていけないということがわかっていますから、帝国大学も最初から工学部とかをつけている。ヨーロッパの大学には工学部というのはありません。工学部は別な専門学校なんです、それを付け加えたりして日本なりに工夫はしたんですが、基本的には同じような形でできている。

従って、漱石などもそういう中で育ちましたから、文科大学とか、東大はそういうふうなくつかの大学から成り立っていたわけですが、漱石なども当時の高等商業などの学生が東大に併合されることに反発して全部退学した事件などを揶揄していますね。そして二葉亭四迷なども、東京外語は東京高商と一つになれと言われたときに、自分はそんなような商人の学問はやりたくないと言っています。

もちろん漱石の意見かどうかは別として、漱石の作品の中には実業界の人間に対する徹底的な蔑視した考え方があちこちに出ています、彼の家に集まっている人々はみなどちらかと言えば日常生活から離れた空理空論をもてあそぶ人々というふうに見えます。そして、近所の金持ちの金貸しとか、クロを飼っている車屋のおやじなんかもやつぱりバカにされているという雰囲気がいなめないわけです。

そういう漱石と、一〇〇〇年も前のフーゴーと比べてみると、全然違った人間類型だというふうにも見えますが、これはやはり当時のドイツの学芸というものを受け入れるとあいうふうになる。しかもそのドイツのベルリン大学に入った人々の社会的な状況を見ますと、みな有産階級なんです。つまり、働かなくても食える。漱石の作品に出てくる人物もほとんど働いてない人が多いので、働かなくても食える。しかも働いている人の場合も、みな官吏です。官吏として働いている。実業界の人は一人も登場しません。

そういう状況で教育というものがあつた。従ってベルリン大学においても一般教育が問題になつたんですが、その場合も学問全体を貫いている哲学的な精神を喚起することが問題だったわけです。そういうふうな中で学者一般の大切な使命というものがあつて、それも古典を読むこと、そして宇宙について思いをはせ、地球全体について思いをはせというふうなことが求められていた。

日本の旧制高校の学生たちも常に天下国家を論じたわけです。そして、私の大学の卒業生たちもたくさんいます。そういう人たちも、いまでももちろんそういう感化を

受けた人々、いわば私から見れば大変なエリートです。当時の大学を卒業した人なんていうのは、たいへん数が少ない中で勉強した人たちはエリートで、身の処し方もみごとであります、しかしやはりいまの学生は天下国家を論じないと言って批判をします。

天下国家を論ずるといふことがそんなに立派なことかどうかは別として、現在の学生たちはもつと身近なところから、もし天下を論ずるとしても身近なところから、自分が具体的に行動することを考えるという点で、このフンボルト的な理念に基づいて教育を受けた人々とは基本的に違っているとは私は思います。これはなかなか難しい問題ですが、こういう哲学、たとえば私自身も「哲学概論」などを読んで勉強させられましたが、ほとんどが大体ヨーロッパのものの翻訳にすぎなかった。これはたいへん残念であります、そうであつたと思います。

そして、ついでに余計なことを言いますと、いまたいへん評判になつてゐる『ソフィーの世界』という本がありまゝです。これは実にうまくできた、たいへん勉強している高等学校の先生が、普段立派な授業をしていると思ひますが、書いた哲学概論としては秀抜なものだと思ひますが、これ

が日本でベストセラーになるといふことはたいへん興味深い現象だと思ひます。どういふことかといふと、基本的には一九世紀的な、さっきのフンボルト的な哲学あるいは教養の概念といふものを踏まえて書かれてゐるもので、そのうえで古代から現代までの哲学者、あるいは社会科学者の言説を敷衍したものです。わかりやすく、しかも上手に敷衍したものです。そこまでなんです。それに尽きてゐる。

従つて「私とは何か」といふ問いが最初に出てくるんですが、その答えは十分に展開されてゐないのです。今の大人たちは、たとえば戦前の高等学校で学ぶことができなかった。特に女性は高等学校にいくチャンスがなかった。そしてまた、旧制大学にいくチャンスもなかった。こういう人々はまわりの男性たちを見て、リーダーからしてリーダーグーとか差別があつた。それを見て残念だと思つてきた人々は、いま『ソフィーの世界』を読むと追いつけるわけです。

亭主がかつて旧制帝大の卒業生であつたとしても、たとえばプラトンにおけるイデアとは何なんて聞いたつてパツと返事は返つてこない。しかし『ソフィーの世界』を読めば、イデアとは何かといふことについて一応の答え

が書かれているという点では、非常に簡単な教養入門なんですね。しかしそれは、旧態依然たる一八世紀、一九世紀的な教養をわかりやすく敷衍化したものにすぎないのであって、ヨーロッパ人にとってはかなり意味を持つかもしれないけれど、日本人にとってはそういう旧態依然たる教養を補強する意味しかないと思います。

しかし、ああいう発想はたいへん面白いので、注目すべき本だと思います。つまり、自分とは何かという問題が、日本の場合は全くないんです。私は学長になつてもう四年目ですが、ゼミを続けていまして、二〇年前からやっているゼミで、これは来た学生たちに、一〇人ぐらいいるんですが、一人一人になぜ自分がここにいるかということを書かせるわけです。

そうすると、面白いことにたいいてい親の批判になります。いままでだれにも言ったことがないし、親にも言ったことないけど、正直に書きますと言つて、一時間ぐらいしゃべるために原稿用紙二〇枚ぐらい書いてくる。二時間で二人しゃべる。しゃべっている間からすでにほかの学生からいつぱい反応がありまして、みな一生懸命にうちもそうだとかいう話になります。

不思議なことに父親の批判は出てこないで、母親だけです。父親は多分存在してないんじゃないかと思われるような感じでありますが、それが半年ぐらい続きますとやがてそこから卒業して、徐々に親にもこういうことを言う理由があつたということが解つてきて、これが世間論に結びつくわけでありますが、そうして社会科学に向いてくるのです。

社会科学をやるときに、私とは何かとか、自分とは何かを問わないで、いきなり社会科学をやれといつても、それは無理だと思うんですね。つまり、いきなり抽象的な概念から教えたりするということはほとんど不可能だと、私は思います。私自身が、たとえば学生時代に「大塚史学」とかいろんなものを読まされたんですが、まったく理解できなかった。私の先生の言葉とかそういうものは身にしみるようにわかつたんですが、しかし「大塚史学」というのは私には全く無縁だった。従つて、あれは基本的にはキリスト教というものを踏まえないと難しいと思いますが、いまになれば「大塚史学」がなぜ生まれてきたかということはわかります。

しかし、「大塚史学」をそのまま信じてやるという気持

ちはもちろんありませんけれども、ああいう時代であったらだろうと思います。いまの学生たちはもつと身近なところから、たとえばボランティア活動をする中でいろんな問題にぶつかっていき、その社会科学的な解決を考えると、うふうになつているので、天下国家を論じるというふうな考え方じゃありません。

ドイツの教養市民階層

ヨーロッパにおける市民階層はどうなつたか。これは重要な問題です。これについては、私自身の研究ではないんですが、これを教養市民階層と言います。特にドイツで生まれた階層です。この教養市民階層というのは、高等学校を出て大学を出た人々、官吏とか医者とか法律家とか教師、大学の教師あるいはギムナジウムの教師になつた人々がほとんどであります。こういう人々がドイツの世論を形成し、近代の国家をつくつていったと言われています。

そして、ドイツの場合、現代の日本よりはるかに身分制社会の要素をのこしていますから、大学出ということは決定的なことなんです。日本の場合はそうでもないように思いますね。そういう傾向は戦前は強かつたんですが、日

本の場合はそうでもないかに見えます。

というのは、日本の場合、いまはちよつと違つてきました。バブル以前、ある段階以前、田中角栄以前と言つてもいいんですが、大学の教師の給料は非常に低かつた時代が長かつた。戦前は高かつたのです。国立大学の場合には勅任官とか、国家直属だつたんですが、私学の場合でも多分給料は高かつたと思います。戦後に、大学の数が非常に増えて、かつての中学校が全部大学になり、二段階特進する中で給与が大幅にダウンして、そういう意味では特権階層を維持できなくなつた。従つて、大学の教師たちも庶民化した。非常にプラスになつたわけです。

いまは少し変わつてきていますが、ヨーロッパはそうではなかつた。特にドイツは、大学の教授というのははるかに高い地位であつて、そういう経済的にも恵まれた人で、しかも定年後も死ぬまで最後の給料がくるわけでありまして、身分としてももうすでにできあがつている。奥さんも離婚しても教授夫人を名乗れるわけですから、日本の場合には離婚した人が東大教授夫人とは言えないわけですね。そういう状況もあつて、教養市民階層はドイツのいわば中核を担つたと言われています。

こういう人々がどうなったかというところ、ナチズムの担

手になったというのが現在の通説に近い状況です。これについてはいろいろな説があります。私はこの点について十分に勉強しているわけじゃないし、研究しているわけじゃないから、日本における何冊かの注目すべき書物を踏まえて、ドイツにおいてもそういう研究が非常に進んでいますのでそういうものを踏まえて申し上げるわけですが、つまり天下国家を論じ、宇宙を論ずる。そして実務から離れて、実益から離れて、つまり経済とか産業とか法律、あるいはその具体相を離れて論じている人々によって担われた国家というものは、非常に危うい選択をしたということになります。

日本も多分同じだと思いますね。しかし日本の場合は、そこにやや別な問題がからんできていて、これは私の世間論につながっていくので、今日はお話しません。別な問題がからんではいますが、基本的には同じ道を歩んだと思います。いわば学問に基づく純粋な教養というものが、ドイツにおいて破綻したわけです。しかし、ドイツは破綻したけれども、その破綻したことの真髄がわかってないために、いまでもまだ旧制大学がそのまま残っています。もちろん

内容は変わりつつあります。

日本もそうなんです。日本でも農学部とか繊維学部とかという旧態依然たる学問の分野が学部として残っています。が、実態はどうもそうではないらしいですね。日本の場合、特に人文社会を除けば、理工系の学問というのはお金が必要で、常に産業と密接な連絡をとりながらお金をもらってやっていますから、産業のほうの要望が変わってくれば農学部の中でも新しいことをやらざるを得ない。繊維学部も新しいことをやらざるを得ない。従って、農学部、繊維学部という古い看板のもとで非常に新しい研究が営まれているようでありますから、そういう意味ではそれほど心配ないのかもしれないけれども、そういう状況は文系学部全体にもあったわけです。

ドイツでも文系学部は基本的には同じ形で、いまはじめて、去年今年あたりから改革が進められつつあります。つまり、ドイツにおける教養大学はベルリン大学からはじまってほとんど大きい大学は全部そういう学部を持ったわけですが、従ってこれは国家有為の人材を育成するという意味で全部授業料は無料で、いまに至るまで無料でありま

日本の大学は最初から有料で、無料の大学はないんですね。師範学校を除けば大学は全部有料ですが、初期には非常に低い授業料に抑えられていた。ところが最近はそのが非常に高額になってきたということも含めて、そういう教養大学は要らないんじゃないかという声も出はじめているということが一つあります。

もう一つは、現在は情報社会ということもあって、サブカルチャーが非常に広まっているわけです。そして、サブカルチャーというものを取り込んだ大学教育が必要になってきていて、たとえば教科書にマンガを使うなんていう形にもなっているわけで、実験としてはいろいろな意味があるわけがありますが、そういうものがいまの教養概念を非常に混乱させていると言ってもいいと思うんです。

特に大学における教養学部というものの問題は、今日はこちらでお話するつもりはないんですが、大学の先生方が多いのでちょっとだけ申し上げますと、これは言うまでもなくアメリカの戦後の体制を日本の大学が、あるいは国家が受け入れざるを得なかったという状況の中で生まれてきたわけですが、そこで一般教育科目というものが自然科学、社会科学、人文科学という形で必須科目として設定されて

今日に至っている。これは大綱化以後大きく変わってきたわけですが、その意味はどこにあったかというところ、基本的にはさっきお話しした旧制帝国大学も含めた旧制大学、それから高等商業とか高等工業といった専門学校、師範学校、普通の専門学校が全部大学になったわけです。

全部大学になったわけでありませんが、その大学というのが実は研究大学と教育大学に分かれているわけではなく、いまでも国立大学協会で全大学にもアンケートをすれば、そういうことをするとたいへんなのでいまでもやっておりますけれども、アンケートを出して「あなたの大研究大学は何割ですか。教育大学は何割ですか」なんて聞けば、おそらく八割以上が研究大学と言うだろう。九割になるかもしれません。という状況なんです。

日本に五百数十も研究大学が必要かというところ、それはもちろん必要はないとは言いきれませんが、その実体を維持するのは困難です。つまり、財政的にも非常にお金がかかる学問分野が多いわけで、そういう学問分野は、たとえば全部国立に任せて、あとのお金がかからない部分は私学に任せたらいいんじゃないかという議論も自民党の文教部会あたりで出ているようです。

私は、自分の大学を見てみますと、問題は一般教育にあるわけじゃないと思います。もちろん一般教育にも問題は大きいにあります。それはどういうことかというところ、一般教育の教員の採用人事に問題があったから、それは教育というところを視点に置かずに研究にだけ視点を置いて教員を採用してきたために、問題が多くなっています。いま各大学で教育というものについての判定をしなければいけない。

教育評価をやるうとしています。文部省では最近大学審議会にチャットと教育評価のマニュアルの原型が出てきたのだから、たいへん面白いと思っていますが、たとえばクラブ活動とか、あるいは自治会活動とか、ボランティア活動とか、いろんなものを全部網羅して、こういうものを含めて教育活動も評価できるんじゃないかなんていうことを考えようとしているわけですから。

ただ、私は大学審議会でも言っているんですけども、教育評価というのは基本的には大学においては学生評価に頼らざるを得ない面がある。学生評価というものを主にしなければならぬんじゃないかと思っています。私の大学でも、大学としてまだやっておりませんが、学生自治会が非常に活発なところなので、分厚い冊子を出しています。

教員評価、授業評価をやっているんですね。そして、各教官の項には一ページ白紙があつて、その白紙のところには教官の応答が書けるようになっていきます。つまり、評価されてそのときに教官に不満があればそれを書いて出す。教官の応答も含めて出版しています。

しかし、残念なことに学生がやっていますので、AならAという講義に対して非常に反発する学生といたいと思う学生しか書かない。つまり、強制力がないので真ん中のへんが全部落ちてしまう。母集団としては非常に弱くて、まだ客観性がない。

しかし、大学がやろうとすると教官の反発が大きくて難しいという問題があります。いざそれらはやらなければならぬと思います。何となく教官、文部省も含めて非常に学生を信頼していかないという感じがあります。それは、一人一人の学生を信頼しろということではなくて、集団としての学生は、彼らは学問が足りない。教養がない。従って彼らの判断は頼りないんだというふうな判断です。その前提には、学問をした教師のほうをはるかに教養があり、平衡感覚があり、きちつとものが見られるという前提があります。私はその前提は成り立たないというふうな考え

るので今日のようなお話をしているわけです。

学生はどういう状況にいるかというところ、講義を聞かされてしまう状況です。聞かなければならないですね。聞かなければならない、単位を取らなければなりません。従って彼らは努力して教師の意向に沿う形で答案を書こうとする。そういう努力をしている。その中で彼らは教官を観察しています。そして、私が見た限りでは、学生たちが、たとえどんなに不勉強な学生でも、怠け者の学生でも、教官が本場にまじめにやっているかどうか、熱心にやっているかどうかということとは正確に判断できると、私は思います。

そういうことを文部省でも言うんですが、基本的には教養概念とか教養理念の大きな違いがあつて、学問をした人間のほうが、年をとった者のほうが、社会的地位が高い者のほうが、はるかに教養があると思つていらっしゃるんです。これは大きなまちがいだと思います。

それは、今日の話の中で基本的には申し上げたいことなんでしょうが、従来の教養概念は学歴とか財産にかかわってきます。つまり、フンボルト大学の学生たちは、基本的には高等学校にいける階層、高等学校にいける階層は、ドイツ

はいまでもそうですが、小学校四年のときに、あと一〇年以上、学位を取らなければいけませんからもつとですが、働かずに食べられるという条件があります。ドイツの学生はほとんどアルバイトしませんから、アルバイトできないということもありますが、親の財産とか奨学金で暮らさざるを得ない。

そういう意味では、非常に少数の人しかいけなかった大学に、いまは大量の学生が押し寄せている。ドイツの大学もマス化しつつある。もうマス化が進行しているんですね。そこで大学も困っているし、対応できない。その対応は、やはり基本的には学問に対するいわばチャレンジですから、簡単には対応できない。

私は、ドイツの大学がどうすべきかという話になると「新しい大学をつくるしかないですね」と言っているんですね。つまり、古い大学が体質改善をするということは容易じゃない。ドイツの場合は、日本と違って教師はどこへでも行く自由がありますから、招聘されればどんどん行く。招聘されない人間というのは落ちこぼれですから、自分が育つた大学にずっといるなんていうのは一番の落ちこぼれで、どんどんよばれてあちこち行くことによつて給料

が上がるというのが昔のシステムです。

しかし、そうでない教師がいっぱいいるところ、そして旧態依然たるシステムを持っているところは、新しいマシ化には対応できませんから、多分改革はできないだろう。従ってドイツでやろうとすれば、新しい大学をつくるしかないというふうに思いますが、これも多少実験してポフムとかいろいろできましたが、やはりそこに来る教師が旧態依然たる身分保障を求めてきたりしますので、そう簡単ではないので、大学の改革は容易じゃないのです。

しかしそういう問題を考えるときに、基本的には、たとえば入試の問題一つ取っても、入試でいい学生を選抜するとかいうことが実に困難になってきている。これは皆さんお考えのことだと思えますが、予備校がその手助けをするので、どんな問題を出してもすぐ予備校が教育をしてしまう。たとえば京大の経済学部でやっている長文の論文を読ませて云々というのは私はいい案だと思えますが、ああいう形にすることによって選抜できるでしょう。あれをもし予備校が習練するとすれば、予備校は京大並みの教育をしていることになるので、そのこと自体は決して否定すべきことではないので、そこでやったら京大へこなくていいこ

とになるかもしれない。極端に言えばですね。しかし、そういう授業はなかなかできないでしょう。

従って、あれは古い大学の理念を維持するためにああいう形になっている。入試問題も含めてたいへん困難な問題ですが、その根底にある問題が見逃されているから、いろんなところで議論されてもその議論は本格的なところにならない。雑誌の『世界』で数カ月前に何人かの学者たちが集まって京大の先生が二人、あとは大塚英志さん、政治学者の猪口邦子さんも含めて議論していましたが、読んでいて非常におかしいなと思ったのは、つまり教養とは何かという合意がない。合意がないところで教養をどうすべきかという議論をしている。

大塚英志さんは当然サブカルチャーを含めて教養を考えようとしているのです。するとほかの先生たちは、サブカルチャーなんかを含めて、つまりマンガなんかを含めて教養なんて言えないよという話になります。そこで大塚英志さんは後で朝日と読売にその批判を書いておりましたが、全体として教養とは何かという合意がない状況なんです。そういう中で大学改革も行われたし、教養部の解体が起こっている。

いま我々の大学でもそうですが、教養部はもともとありませんでしたから、教養部教官というのはいなかったのです。全部学部教官だったのですが、これが全部各学部専属になり、いわば自分たちの大学院まで持ったんですが、それでは一体教養はどうするかというときに、教養とは何かということについての合意がない。私は先ほど申し上げましたような意見をもっておりますが、これは私一人の意見で、多分文部省などは簡単に理解しようとしないう。う。

そしてまた本を書いて、読む人しか読まない。大学では私はそういうことをあまり積極的に言いませんので、そういうことを言ったことによつて非常に困難を抱え込むことにもなりかねない。しかし、文章を書いていきますから読む人は変わるだろうと思つていますが、なかなか変わらな。い。つまり、四〇代、五〇代の人が変わることを期待するのは無理なので、そうすると四年間かけて教養教育を行うというときに、やはり従来のような、たとえば教養科目担当教官だった人は自分たちの利権を守ろうとする。つまり、英語教官の人数は減らすな、ドイツ語教官の人数を減らすなという声にしかならない。そういう声にしかならな

いとこで教養問題が論じられるという低次元の問題が大学の議論ですね。

こういう機会に教養とは何かという話ができることはたいへんありがたいので、私はこういうチャンスが与えられればどこへ行つてもお話するんですが、基本的には教養とは何かという問題は、世間とは何かという問題の延長線上に出てきたわけです。世間とは何かについてお話はしないんですが、一言だけ申しますと、日本の社会学者、あるいは人文科学者と言つてもいいんですが、やはりヨーロッパ、アメリカというものに非常に重点を置きすぎていると思つてますね。重点を置きすぎていることは、私自身が置いているんですから人を批判はできませんが、つまりヨーロッパ、アメリカを見てそこから発言するという形になっていきます。

公共性としての「世間」

たとえば、日本で公共性という問題は大きな空白地帯で、論じられてもいないのです。ハーバマスの公共性についてすらほとんど論じていない。翻訳が一応あるだけです。しかし、私は日本の社会の大問題は公共性だと思いま

す。中教審の答申が出ましたが、あんなものを見ていても、やはり公共性の教育というものは全くなされてない。しかし、公共性という問題がない社会はないと思うのですね。よほどの絶対王政と奴隷だけで成り立っている国家でない限りはないと思います。日本の社会に公共性があつたという前提で考えますと、私は、世間という概念しかないのではないかと思うのですね。

たとえば丸山真男さんでも大塚久雄さんでも世間について論じたことは一度もないし、関心が多分ない。やはり彼らも公共というヨーロッパの訳語で議論しようとしている。そのときに彼らは念頭に置いているのは学者たちだけで、あるいは大学を出た人たちだけで、いわば教養市民階層だけを念頭に置いて自分たちの文章を書いていると思うのです。

そこでは、たとえば一般の庶民、魚屋さんとか漁民とか農民とかに直接語りかける形になっていない。公共性なんて言った瞬間にみんなそっぽを向いてしまいます。しかし、世間というとき、みんな聞いてくれます。私は、地方で、山形県とかで世間の話をしますと、三〇〇人、四〇〇人集まって聞いてくれて、その後で手紙がきて、家庭の主

婦たちが集まって喫茶店で勉強会をしたというのがくるわけです。それはどういうことかというとき、自分の亭主が世間からめとられていくことを知っている。そして、そのために皆さん苦労しているということがあつて、そういう反応はたいへん大事だと思つているので、そういうときにもできるだけ忙しい時間を繰つても行くわけです。

こんなことを言うのはたいへん恐縮ですが、たとえば民博で話をしたこともあります。あそこで私は共同研究員をやつていたことがあるのでこの話をしましたが、なかなか世間論は、大学の先生方には理解していただけないものがあつて、つまり世間論というのは日本の社会の中にはヨーロッパ的な個人はいないということを前提にしています。ヨーロッパ的個人はいないので、みな自分たちの世間というものの中に生きています。その世間というものを基準にして、我々は生きています。

学問の世界はやや別で、学問の世界は西欧化された概念によつて営まれていきますから、学問の世界だけは一応西欧化している。しかし西欧化された学問と、自分の本音の世界である世間との間には大きな乖離がある。これが日本の

近代のいわば宿命であります。たとえば、日本人には建前と本音の差があると言われますが、これも歴史的な根拠があるわけで、明治のころに日本は近代化しなければならなかった。インフラストラクチャーはみな近代化しました。たとえば教育も含めて、行政制度、司法制度、軍制、教育制度等々全部含めて西欧のスタイルで組織ができ、制度ができ、法律もできました。

しかし、法律などはその典型ですが、ヨーロッパの法制そのものを直訳した。そこでみんな新しい概念をつくった。そのために刑法などは、最近では批判の声が出てきてわかりやすくなりつつありますが、読むにたえない。読んでもわからないという形になっている。これは、知らしむべからずという精神がそこにあるからですけれども、つまり日本にはそういう難しい法律はなかった。江戸時代まではみな法律があってもそれはしきたりで賄われてきたわけで、それは世間の目が厳しいということでも賄われてきた。

明治政府は、近代的な制度をヨーロッパ、アメリカから入れて、しかしどこを変えなかったかという点、自分の身の回りのこと、人間関係、家庭とか、あるいは家庭を中心とした周辺の間人間関係は全部維持した。変えようとしな

った。一番典型は北海道の開拓吏たちの建物を見るとわかります。外側は北米の建物をそっくりまねているから、全く区別が付きません。しかし家に入るといきなり土間で、それから畳の部屋で、障子があって、囲炉裏が切つてあって、押し入れがあるという形になっております。もちろん後には徐々に変わっていきませんが、そういういわば明治政府、大正のころまでの発想があつて、いまでもそうです。

従つて、我々は教育も建前の教育を受けてきた。たとえば小学校の先生たちが我々に言ったことは何か。友人を大事にしなさい。正しいことは常に正義感をもって闘いなさい。一人自分の意見は常にはつきりと言い、どんなに権威が立ちふさがつてもがんばつて言いなさいとか、そういうことを教わつたのですね。

そういうことをもう正面切つてやつたらひどい目にあふということ、だれも教えてくれなかった。そういうことを本当に言いたいときは、上手に言わなければいけない。つまり、建前と本音の区別のときの本音を出してはいけないということ、あるいは建前だけをいきなり叫び声で言うときには後ろに集団がいなければならぬ。大きな集団を抱えた建前集団がいっぱいありますから、その集団を抱え

ていれば、その集団にのっとって言えば、その集団の人々は少なくとも理解してくれる。しかし、建前としての男女平等とか、あるいは建前としての正義とかいうことを大声で言えばバカにされるのがオチであって、なにかをくみ取ることができないし、何も実現できない。

たとえば、ある会社で一人の男がクビになりかかっているのを救おうとするときに、人権なんてことを持ち出して勝つ可能性は全くない。そのときには、もっと上手に建前の中に本音をもぐり込ませ、本音の中に建前を生かすという知恵が必要で、そういう教育は一切受けなかったのです。

日本人は、建前だけを小・中・高で教えて、本当のところ、つまり建前を生かすためにはどうしたらいいのか。日本の社会とヨーロッパの社会は違うんだから、そこを上手にやっていくという道は、それぞれ自分が世間に入れてもらったときに、あるいは大人になって世間の中に入れてもらったときにひとりで学ぶものですよということを、親は最初から言おうとする。親は世間で苦労してきましたから、子供のときからいきなり言おうとする。それが実に拙劣で、自分の経験だけを金科玉条として、世間はそんなもの

じゃないよと高飛車に言うものですから、子供たちは全く反発してしまうということになるわけですね。つまり、家庭教育にもそれが影響している。

日本社会全体が建前と本音との違いを使い分けなければやっていけなかった時代に生まれた、いわば文化的な宿命みたいなものがありまして、そのところで本当の意味での教育が行われなかった。みな本音を言わないようにして生きてきた。教師もそうです。しかし教師も、私の経験では、中学校の教師が卒業のときに、さっき言いました建前を延々と式辞で述べて、大分たつてから大学を卒業するときに、大学院に進学したのでどこかでアルバイトしなければならぬ。

中学校の講師の口を紹介してもらおうと思って行きましたら「君はあの先生のもとにいるんだな。あの先生のもとにいたら就職なんかできないよ。あの先生のところを出なさい」と言ったんですね。つまり、あの先生は日教組の講師団に入っているような人で、こんな人のもとにいたら紹介できないし、する気にもなれないから、まずやめてから来なさいと言われて、私は非常に驚いたんですが、あの中学校の卒業式の式辞は何だったのか。

つまりあれは建前にすぎなかつたということがすぐわかるわけですが、そういうことを学生が読み取れるようにならなければいけないわけです。我々自身もその二つを使い分けて暮らしているから日本で無事に暮らしているわけで、その使い分けというを知っていないとやっていけないということがあります。

それは教養という問題についても同様で、やはり書物とか文書とか学歴とかいうものが教養だというふうな考え方をどこかで否定していかなければいけない。個人の教養は従来そうであつた。

しかし集団の教養というものがあつて、集団の教養というのは、たとえば満州から引き揚げてきた人々が、強制的に行かされた人々ですからこれは本当にたいへんな思いをして帰ってきたときに、その人たちは、山梨県のあたりでいまでも農業をやるうとしてゐるわけです。帰つてきて二〇年ぐらいして、やつと食えるようになってきた。

この人々が満州にゐるときから、引き揚げ船の船の中で、ずっと俳句の会をやつてゐる。そこに、つまり中央の俳壇をすてた人が行つて指導しているというテレビの何かを見たことがあります、あれも一つの集団の教養です。

俳句なんていうのは個人のうたいなんですね。自分をうたうわけです。

実は日本の俳句は、短歌もそうですが、個をうたうように見えていて常に世をうたつてゐる。世の中とか無常をうたつてゐる。無常というものは、基本的には世間とか世の中と裏腹な関係にあつて、日本の場合の世間というものはハーバースの公共性と根本的に違ふところがあつて、それは現世、いまの世がいつまでも続くことを願つてゐるわけです。改革とか革命なんていう発想はないのです。しかし、人はどんどん死んでいつてしまふし、時代は変わつてしまふというのを嘆いてゐる歌が圧倒的です。

つまり、現世というのは世俗的な観点から眺められたときは永久に続くのがいいと思ひ、現世というものをもう少し広く考えれば、これは厭離穢土であつて、こんな世を早く去つてあの世に行きたい。従つて日本の世の中とか世間というものの教えの中には、世間でいかに生くべきかという教えは、多分吉田兼好あたりにしかなひ。それ以前にはほとんどありません。鴨長明なんかは都の中での生き方については書いてゐます。都だけが世間ですから、山里には世間はないというふうには彼は考へてゐる。

というふうに考えますと、社会の中で自分の位置がいかにあるのかとか、どういう位置にあるのかという発想は、多分日本にもなくはなかつたのですが、それはほとんど集団の質問にすぎなかつた。貴族たちの質問、あるいは疑問、そういうものにみな答えて、俳句とか短歌が作られてきた。江戸時代になつてはじめて、商品経済の展開ということもあります、西鶴などの中から個の疑問が生まれてきて、それが日本の近代の中に流れ込んでいくわけですが、そういう問題については今日お話しするつもりはなかつたので、いまは付けたりであります。

教養の二つの形を個人と集団と分けたのは、基本的には文字と文字によらない教養ということで、文字によらない教養については、今日は話が非常に不十分でした。それは、個人の教養のほうに重点を置いたためですし、もう一つは文字によらない教養についての私の勉強がまだまだ不十分で、これから先もう少しそれをやりたいと思いますが、大体一時間半たちましたので、一応話をここで終わらせていただいて、あとでまたご質問がありましたらお受けしたいと思います。

(あへ きんや・一橋大学学長)

(編集委員会注記) 本稿は一九九六年一〇月五日、大阪経済大学で行われた第六回経済史研究会の講演内容である。